愛知教育大学研究報告，58（教育科学編），pp，51～59，March，2009

円環イメージ画にあらわれる大学生の親子関係表象
―愛着との関連からの検討―

五十嵐哲也

養護教育講座

Relation between Images of Parent-Child Relationship Projected on Two Circles and Attachment Among University Students

Tetsuya IGARASHI

Department of School Nursing and Health Education, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

Ⅰ　問題と目的

青年期は，自我の確立に向けて親からの自立を模索していく時期である（吉田・山内[1]）。そのため，その関係性は質的変化を迎えることとなり，転換期を迎えた親子はそれまでに抱えてきた問題を改めて検討する時期に差し掛かると考えられている。特に大学生は，親元を離れて生活することや，アルバイトなどによる社会経験を通じて，著しく親子関係の変化が具現化する。そして，そのような経験を通じて変化した親子関係は，大学生の心理的成長に大きく関与することとなる（丸山・奇[2]）。また，社会生活上の問題を取り上げても，大学入学という環境移行期の適応が，それまでの親子関係の愛着状態によって異なる可能性があることが指摘されている（丹羽[3]）。このように，青年期の親子関係をめぐる問題は重大であり，家族関係への援助を行う際，家族の状態や個々の家族成員の認識を適切に理解することが必要である。

そこで，親子関係診断尺度（辻岡・山本[4]）などをはじめとする質問紙法，動的家族画といった投映法（日比[5]）などが開発され，これまで心理アセスメントの技法として用いられてきている。特に投映法に関しては，小川・松尾[6]は，質問紙法など言語的手法によるものに比較して回答への態度がテスト結果に反映しにくく，親子関係の葛藤を認知しやすい青年期にあっては有効であることを述べている。しかし大熊[7]が指摘するように，日本における家族アセスメントへの関心は必ずしも高くなく，その方法も十分に確立されているとは言い難いため，早急な実証的研究の蓄積が求められている。

ところで，この親子関係をアセスメントする投映的手法の一つとして,「円環イメージ画」がある。これは，幼い頃の母と子に見立てた２つのイメージ円を描くことで母子関係イメージを把握する方法で，松尾・小川[8]によって提唱されたものである。松尾・小川[9]によれば，それは２つの円を描くという簡便な方法だが，母親の存在の大きさをあらわす「円の大きさ」や，関係の緊密さやつながりの深さをあらわす「円の包摂」といった独自の観点を備えていると指摘する。数量的検討としては，大学生を対象にした松尾・小川[8;10;11]があり，幼児期の母親の養育態度との関連や，「幼いとき」と「現在」の２枚の円環イメージ画と母親の養育態度との関連を明らかにし，円環イメージ画に対するイメージ評定を行っている。加えて，宮本・佐藤・北本[12]は，女子大学生を対象に調査を実施し，「幼い頃」と「現在」の円環イメージ画の結果と内的作業モデルとの関連を検討している。中学生を対象とした研究では小川・松尾[6]があり，大学生の結果との比較から，約半数が母親と自分の円を独立した横並びに描いていること，共感性が高いほど２つのイメージ円を近くに描くことなどの特徴を見出している。また五十嵐・萩原[13]は，中学生を対象とした「現在」の母子円環イメージ画に加え，父子円環イメージ画もあわせて実施することにより，両親に対する表象のズレの観点から考察を加えている。

以上のように，円環イメージ画は比較的新しく提唱されたアセスメント方法だが，その有用性は高いことが示唆される。特に，当初は幼少期の母子関係に限定されて用いられていたものの，その変法として現在のイメージ円を描く手法が導入され，親子関係理解のさらなる発展を遂げている。しかしながら，父子円環イメージ画の導入はまだ始まったばかりであり，検討すべき課題が多く残されていると言えよう。その一つとしてあげられるのが発達的な視点である。これまでの研究で父子円環イメージ画は中学生にしか適用されていないが，先に述べたように，大学生の親子関係は発達上大きな転換期にあると考えられる。大学生の父子関係をも含めた親子関係表象を理解することは，そう

した心理的発達の様相を検討するための基礎的知見を提供するものと考えられるが，そのツールとして円環イメージ画が適切であるか否かを検証する必要がある。また吉良・田中・福留[14] によれば，大学生に対する学生相談活動における様々な主訴の背景に親子関係の問題が認められるとされ，結果として相談内容の中で親子関係が占める割合は比較的多いことが示されている。この指摘を踏まえれば，学生支援のために，簡便な方法で母子・父子関係を理解する心理アセスメントツールの開発が必要とも考えられる。

そこで，本研究では，大学生を対象に，「現在」に焦点を当て，母親のみならず父親との円環イメージ画を実施することにより，大学生期の母子・父子関係理解のための円環イメージ画の有用性を検討することを目的とする。その際，円環イメージ画があらわす親子関係の状態を検討するために，宮本・佐藤・北本[12] と同様，愛着の視点を導入する。Fury, Carlson, and Sroufe [15] も，愛着測定に家族画が有効であることを指摘しており，円環イメージ画に表現される諸特徴が愛着とどのような関連性を有しているのかを検討することは，重要であると示唆される。また，愛着の視点からみると，父親は二次的愛着人物（Bowlby[16;17]）としての重要な位置づけを担っている。

以上を踏まえ，本研究は大学生の円環イメージ画と愛着との関連を検討する。円環イメージ画については,「現在」の関係をイメージして，母親と自分の円，父親と自分の円を描くよう教示する。

II　方法

１．対象

A 県内の大学１～４年生および B 県内の短期大学１年生を対象として，調査を実施した。このうち，父母双方，もしくはいずれかの描画が描かれなかった者，描画の教示が無視された者などを分析から除外した。その結果，分析の対象となったのは217名（男子116名，女子99名，不明２名）であった。平均年齢は18.58歳で，18～27歳の範囲であった。

２．調査内容

（１）愛着

佐藤[18] を一部改変した五十嵐・萩原[19] の14項目を用いた。「安心・依存」「分離不安」「不信・拒否」の３因子構造であった。「あてはまる」～「あてはまらない」の５件法。

（２）母子円環イメージ画

松尾・小川[8;10;11]，小川・松尾[6] を参考に，「今のあなたにとって，お母さんはどんな存在であり，お母さんと一緒にいるとどんな感じがしますか？イメージして，それを二つ（あなたとお母さんの一つずつ）の円であらわしてください。」と教示した。

（３）父子円環イメージ画

（２）と同様に，ここでは父親を思い浮かべてもらうよう教示した。

３．調査時期と手続き

2007年６月上旬～下旬の講義時間中に担当教員が一斉に実施し，その場で回収された。

４．結果の整理

円環イメージ画に関して，松尾・小川[8;10;11]，小川・松尾[6] を参考に，関係，位置，距離，大きさの比の基準に則って対象者を分類した。関係は，内部，交錯，外接，分離に分類された（Figure １）。なお，松尾・小川[8;10;11]，小川・松尾[6] は，内接（大きな円の内部で小さな円が接している状態）と内包（大きな円の内部に小さな円が入り込んでどこにも接していない状態）を区別して分類している。しかし，本研究では内接および内包を示した対象者数が極めて少なかった。そこで，内接と内包を合成し，内部という分類基準を設けることとした。位置については Figure ２に基準を示す。松尾・小川[8;10;11]，小川・松尾[6] に則り，上・横・下・斜め下に分類された。距離は，2つの円が最も近い点を結ぶ距離を測定した。大きさの比は，それぞれの円の直径を測定し，父もしくは母の円の直径を基準とした際の，子の円の直径の比率を算出した。

III　結果

１．円環イメージ画の特徴

（１）「関係」の特徴

父子（70.37%），母子（53.46%）とも「分離」の円を描いた者が最も多かった。その他，父子円環イメージ画では内部（3.24%），交錯（17.13%），外接（9.26%）であり，母子円環イメージ画では内部（7.83%），交錯（25.35%），外接（13.36%）であった。性差を検討したが，有意差は認められなかった。

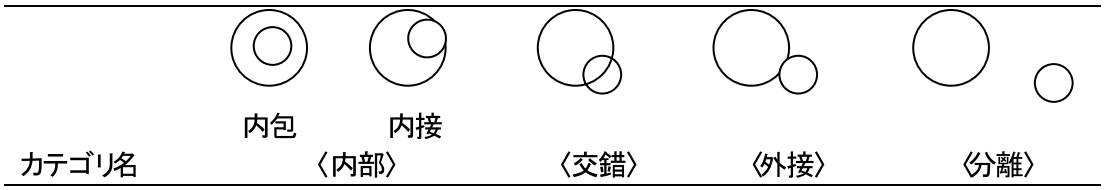

Figure １　関係の分類基準（小川・松尾[6] を参考に作成）

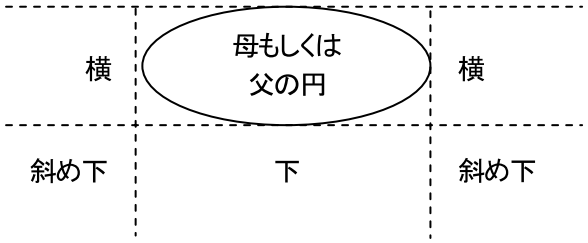

Figure 2　位置の分類基準（小川・松尾[6]を参考に作成）

（2）「位置」の特徴

位置は，父子（76.96%），母子（87.10%）とも「横」の円を描いた者が最も多かった。その他，父子円環イメージ画では上（3.23%），下（6.45%），斜め下（13.36%）であり，母子円環イメージ画では上（2.76%），下（3.69%），斜め下（6.45%）であった。性差は認められなかった。

（3）「距離」の特徴

距離は，父子円環イメージ画で0.00mm～264.00mm，母子円環イメージ画で0.00mm～111.00mmの範囲であった。平均値は，父子円環イメージ画でM＝17.69mm（SD＝28.33），母子円環イメージ画でM＝9.41mm（SD＝16.42）であった。性差は有意ではなかった。

（4）「大きさの比」の特徴

大きさの比は，父子円環イメージ画で0.08～22.40倍，母子円環イメージ画で0.05～7.78倍の範囲であった。平均値は，父子円環イメージ画でM＝0.89倍（SD＝1.61），母子円環イメージ画でM＝0.80倍（SD＝0.59）であった。父子円環イメージ画の場合，父よりも子の円が小さいもの（父＞子）は80.18%，父と子の円の大きさが等しいもの（父＝子）は6.45%，父よりも子の円が大きいもの（父＜子）は13.36%であった。母子円環イメージ画の場合，母よりも子の円が小さいもの（母＞子）は79.72%，母と子の円の大きさが等しいもの（母＝子）は6.91%，母よりも子の円が大きいもの（母＜子）は13.36%であった。性差は有意ではなかった。

2．円環イメージ画と愛着との関連

（1）「関係」と愛着との関連（Table 1）

父子円環イメージ画の「関係」の違いによって愛着に差があるかを検討するために，「関係」を要因とする1要因分散分析を行なった。その結果，交錯や外接した円を描いている者は，分離した円を描いている者より，父への「安心・依存」得点が有意に高かった。また，外接した円を描いている者は，分離した円を描いている者よりも「分離不安」得点が有意に高い傾向にあった。母子円環イメージ画については有意な結果が得られなかった。

（2）「位置」と愛着との関連（Table 2）

同様に，父子円環イメージ画の「位置」を要因とする1要因分散分析を行なった。その結果，父より自分の円を斜め下に描いている者は，上に描いている者より父への「分離不安」得点が有意に高い傾向が示された。これは，母子円環イメージ画でも同様であった。加えて，母子円環イメージ画については，母より自分の円を上に描いている者は，横に描いている者より母への「不信・拒否」得点が有意に高かった。

（3）「距離」と愛着との関連（Table 3）

さらに，父子円環イメージ画の「距離」によって愛着に差があるかを検討することとした。分析に先立ち，距離の大きさの上位・下位33%を基準に，対象者を大・中・小の3群に群分けした。その群分けを要因とする1要因分散分析を行ったところ，父と自分の円の距離が大きい者は，小さい者に比べて父への「不信・拒否」得点が有意に高く，「分離・不安」得点が有意に低いことが明らかとなった。また，父への「安心・依存」得点は，距離が遠くなるにつれて有意に低くなることが示された。母子円環イメージ画でも，同様の基準に則り対象者を群分けした。その結果，母との距離が大きい者は，小さい者に比べて母への「安心・依存」得点が有意に低い傾向であることが認められた。

（4）「大きさの比」と愛着との関連（Table 4）

ついで，父子円環イメージ画の「大きさの比」によって愛着に差があるかを検討することとした。分析に先立ち，父子の円の大きさが同じか否かを基準に，対象者を父＝子，父＞子，父＜子の3群に群分けした。その群分けを要因とする1要因分散分析を行なったところ，有意な結果は得られなかった。母子円環イメージ画でも，同様の基準に則り対象者を群分けした。その結果，母＜子の円を描いた者は，母＝子の円を描いた者より「分離不安」得点が有意に低かった。

Table 1 「関係」による父親への愛着の差

	内部		交錯		外接		分離				
父	*M*	(*SD*)	*M*	(*SD*)	*M*	(*SD*)	*M*	(*SD*)	*F* 値		
安心・依存	3.29	(1.33)	3.72	(.76)	3.95	(.66)	3.20	(1.06)	5.27	*	交錯・外接＞分離
不信・拒否	2.86	(.80)	2.46	(.79)	2.76	(.93)	2.87	(.97)	1.87		
分離不安	1.96	(.82)	2.38	(.94)	2.74	(.88)	2.20	(.93)	2.42	†	外接≧分離

†$p<.10$　　*$p<.05$

Table 2 「位置」による父親及び母親への愛着の差

	横		上		下		斜め下				
父	*M*	(*SD*)	*M*	(*SD*)	*M*	(*SD*)	*M*	(*SD*)	*F* 値		
安心・依存	3.34	(1.03)	2.70	(1.23)	3.65	(1.10)	3.43	(.91)	1.22		
不信・拒否	2.81	(.96)	3.07	(.86)	2.54	(1.04)	2.74	(.83)	.52		
分離不安	2.25	(.92)	1.50	(.61)	2.15	(.93)	2.56	(1.03)	2.41	†	斜め下≧上
母											
安心・依存	3.85	(.91)	3.16	(.55)	3.46	(1.18)	3.60	(1.02)	1.55		
不信・拒否	2.69	(.92)	3.84	(.95)	3.20	(.77)	2.96	(1.09)	3.33	*	上＞横
分離不安	2.53	(1.02)	1.55	(.62)	2.29	(1.25)	2.86	(.92)	2.17	†	斜め下≧上

†$p<.10$　　*$p<.05$

Table 3 「距離」による父親及び母親への愛着の差

	距離小		距離中		距離大				
父	*M*	(*SD*)	*M*	(*SD*)	*M*	(*SD*)	*F* 値		
安心・依存	3.73	(.82)	3.37	(1.05)	2.97	(1.05)	9.56	***	小＞中＞大
不信・拒否	2.62	(.86)	2.74	(.88)	3.03	(1.07)	3.32	*	大＞小
分離不安	2.43	(.93)	2.32	(.93)	2.03	(.92)	3.24	*	小＞大
母									
安心・依存	3.96	(.84)	3.74	(.74)	3.63	(1.11)	2.72	†	小＞大
不信・拒否	2.62	(.90)	2.80	(.78)	2.93	(1.08)	2.27		
分離不安	2.58	(.97)	2.43	(1.00)	2.49	(1.12)	.39		

†$p<.10$　　*$p<.05$　　***$p<.001$

Table 4 「大きさの比」による母親への愛着の差

	A 親＞自分		B 親＝自分		C 親＜自分				
母	*M*	(*SD*)	*M*	(*SD*)	*M*	(*SD*)	*F* 値		
安心・依存	3.81	(.90)	3.71	(.94)	3.84	(1.08)	.09		
不信・拒否	2.78	(.96)	2.57	(.95)	2.69	(.82)	.40		
分離不安	2.53	(1.04)	3.18	(.81)	2.14	(.84)	5.13	**	B＞C

**$p<.01$

３．円環イメージ画と父母間の愛着のズレとの関連

父母間の愛着にズレがある場合を取り上げ，それが円環イメージ画ではどのように表現されているかを検討することとした。ズレの大きさの分類は，以下の方法で行なった。まず，下位尺度ごとに父母間の下位尺度得点差を算出し，それを絶対値化して下位尺度ごとのズレ得点を算出した。次に，その下位尺度ごとにズレ得点の平均値を算出し，平均値よりズレ得点が大きい場合を父母ズレあり群，小さい場合を父母一致群とした。さらに，父母ズレあり群については，父母のどちらの得点が高いかによって父＞母群と父＜母群に分類した。また父母一致群については，それぞれの下位尺度得点がその平均値よりも父母ともに高い場合を父母一致高群，ともに低い場合を父母一致低群として分類した。そこで，これらのズレ分類と円環イメージ画の各指標とのクロス集計を行って出現頻度を明らかにした上で，フィッシャーの直接確率検定により有意差を検討した。

（１）「安心・依存」の父母間のズレとの関連

父子円環イメージ画の「関係」（Table ５）で p-value ＝ .059であった。調整済み残差による検定で，父母間の「安心・依存」が一致して高い者は父と交錯した円を描くことが有意に多く（p ＜ .05），分離した円を描くことが有意に少ないこと（p ＜ .01）が示された。

また「距離」（Table ６）で p-value ＝ .018であり，調整済み残差による検定で，父母間の「安心・依存」が一致して高い者は父との距離が小さい円を描くことが多く（p ＜ .05），距離が遠い円を描くことが少ない（p ＜ .01）ことが示された。また，父より母に強く「安心・依存」を感じている者は，父との距離が遠い円を

Table 5 「安心・依存」の父母間のズレの程度と「関係」との関連

		父				母			
		内部	交錯	外接	分離	内部	交錯	外接	分離
一致高群	*n*	2	11	6	20	5	16	3	15
	調整済み残差	.63	2.35	1.58	-3.17	1.12	2.55	-1.15	-2.05
一致低群	*n*	1	2	0	20	1	4	2	17
	調整済み残差	.25	-1.00	-1.59	1.72	-.79	-1.02	-.76	1.84
母＞父	*n*	4	17	9	94	11	28	22	63
	調整済み残差	-.23	-1.05	-1.04	1.60	.32	-1.05	2.33	-.86
母＜父	*n*	0	2	3	11	0	3	0	13
	調整済み残差	-.79	-.38	1.44	-.28	-1.26	-.61	-1.63	2.34

Table 6 「安心・依存」の父母間のズレの程度と「距離」との関連

		父			母		
		距離小	距離中	距離大	距離小	距離中	距離大
一致高群	*n*	20	15	4	24	9	6
	調整済み残差	2.54	.36	-3.00	2.05	-.92	-1.42
一致低群	*n*	4	11	9	7	6	11
	調整済み残差	-1.91	1.07	.85	-1.84	-.47	2.65
母＞父	*n*	40	40	44	61	37	26
	調整済み残差	-.65	-1.38	2.12	.86	.30	-1.32
母＜父	*n*	5	7	4	3	7	6
	調整済み残差	-.24	.68	-.46	-2.34	1.35	1.30

Table 7 「安心・依存」の父母間のズレの程度と「位置」との関連

		父				母			
		横	上	下	斜め下	横	上	下	斜め下
一致高群	*n*	29	0	4	6	33	0	2	4
	調整済み残差	-.41	-1.21	.92	.43	-.54	-1.10	.64	.92
一致低群	*n*	18	1	3	2	16	3	3	2
	調整済み残差	-.23	.37	1.15	-.76	-3.20	3.38	2.59	.30
母＞父	*n*	100	4	5	15	113	2	2	7
	調整済み残差	1.61	.28	-2.02	-.63	2.10	-.98	-1.80	-.88
母＜父	*n*	9	1	2	4	15	0	0	1
	調整済み残差	-2.04	.81	.92	1.44	.82	-.66	-.79	-.11

描くことが多い（$p < .05$）ことが示された。

母子円環イメージ画では，「関係」（Table 5）で p-value＝.041であった。調整済み残差による検定で，父母間の「安心・依存」が一致して高い者は母と交錯した円を描くことが有意に多く（$p < .05$），分離した円を描くことが有意に少ないこと（$p < .05$）が示された。また父母間の「安心・依存」が一致して低い者は母と分離した円を描くことが有意に多い傾向にあること（$p < .10$）が示された。さらに，父より母に強く「安心・依存」を感じている者は，母に外接した円を描くことが有意に多い（$p < .05$）ことが認められた。また母より父に強く「安心・依存」を感じている者は，母と分離した円を描くことが有意に多い（$p < .05$）ことが示された。

次に，「位置」（Table 7）では p-value ＝ .026であり，調整済み残差による検定で，父母間の「安心・依存」が一致して低い者は母より自分を上（$p < .001$）もしくは下（$p < .01$）に描くことが有意に多く，横に描くことが有意に少ない（$p < .01$）ことが明らかとなった。また，父より母に強く「安心・依存」を感じている者は，母の横に自分の円を描くことが有意に多く（$p < .05$），母の下に自分を描くことが有意に少ない傾向である（$p < .10$）ことが示された。

「距離」（Table 6）では p-value ＝ .016であり，調整

Table 8 「安心・依存」の父母間のズレの程度と「大きさの比」との関連

		父			母		
		親＞自分	親＝自分	親＜自分	親＞自分	親＝自分	親＜自分
一致高群	*n*	32	1	6	35	0	4
	調整済み残差	.22	-1.09	.54	1.79	-1.82	-.80
一致低群	*n*	16	2	6	13	4	7
	調整済み残差	-1.87	.41	1.90	-3.24	2.19	2.22
母＞父	*n*	100	10	14	99	8	17
	調整済み残差	-.06	1.21	-.81	.23	.03	-.29
母＜父	*n*	16	0	0	14	1	1
	調整済み残差	2.03	-1.09	-1.60	.84	-.03	-.96

Table 9 「不信・拒否」の父母間のズレの程度と「距離」との関連

		父			母		
		距離小	距離中	距離大	距離小	距離中	距離大
一致高群	*n*	7	11	16	10	9	15
	調整済み残差	-1.94	-.32	2.35	-2.21	-.31	2.89
一致低群	*n*	27	23	10	33	17	10
	調整済み残差	1.87	.69	-2.67	1.51	-.07	-1.67
母＞父	*n*	26	19	10	23	17	15
	調整済み残差	2.17	-.03	-2.23	-.85	.42	.55
母＜父	*n*	16	22	29	35	19	13
	調整済み残差	-2.33	-.39	2.83	1.08	-.08	-1.18

済み残差による検定で，父母間の「安心・依存」が一致して高い者は母との距離が小さい円を描くことが有意に多く（$p < .05$），母より父に強く「安心・依存」を感じている者は，母との距離が小さい円を描くことが有意に少ない（$p < .05$）ことが明らかとなった。加えて，父母間の「安心・依存」が一致して低い者は母との距離が大きい円を描くことが有意に多く（$p < .01$），距離が小さい円を描くことが有意に少ない傾向にある（$p < .10$）ことが示された。

「大きさの比」（Table 8）では p-value ＝ .027であった。調整済み残差による検定で，父母間の「安心・依存」が一致して高い者は母より自分を小さく描くことが有意に多い傾向にあり（$p < .10$），母と自分を同じ大きさに描くことが有意に少ない傾向にあった（$p < .10$）。さらに，父母間の「安心・依存」が一致して低い者は母と自分を同じ大きさに描くこと（$p < .05$）や母を自分より小さく描くことが有意に多く（$p < .05$），母を自分より大きく描くことが有意に少なかった（$p < .01$）。

（2）「不信・拒否」の父母間のズレとの関連

父子円環イメージ画の「距離」（Table 9）で p-value ＝ .001であった。調整済み残差による検定で，父母間の「不信・拒否」が一致して高い者は，父との距離が小さい円を描くことが有意に少ない傾向にあり（$p < .10$），距離が大きい円を描くことが有意に多い（$p < .05$）ことが認められた。また，父母間の「不信･拒否」が一致して低い者は，父との距離が小さい円を描くことが有意に多い傾向にあり（$p < .10$），距離が大きい円を描くことが有意に少ない（$p < .01$）ことが明らかとなった。さらに，父よりも母に強く「不信・拒否」を感じている者は，父との距離が小さい円を描くことが有意に多く（$p < .05$），距離が大きい円を描くことが有意に少ない（$p < .05$）ことが示された。加えて，母よりも父に強く「不信・拒否」を感じている者は，父との距離が小さい円を描くことが有意に少なく（$p < .05$），距離が大きい円を描くことが有意に多い（$p < .01$）ことが示された。

母子円環イメージ画では，「関係」（Table 10）で p-value ＝ .058であった。調整済み残差による検定で，父母間の「不信・拒否」が一致して高い者は，母と分離した円を描くことが有意に多かった（$p < .05$）。また，父よりも母に強く「不信・拒否」を感じている者は，母と外接した円を描くことが有意に少なく（$p < .05$），母よりも父に強く「不信・拒否」を感じている者は，母と外接した円を描くことが有意に多かった（$p < .01$）。

「位置」（Table 11）では，p-value ＝ .043であった。調整済み残差による検定で，父母間の「不信・拒否」が

Table 10 「不信・拒否」の父母間のズレの程度と「関係」との関連

		父				母			
		内部	交錯	外接	分離	内部	交錯	外接	分離
一致高群	*n*	0	3	4	27	1	6	3	24
	調整済み残差	-1.17	-1.41	.54	1.28	-1.16	-1.14	-.86	2.21
一致低群	*n*	3	14	7	36	6	17	10	27
	調整済み残差	.90	1.48	.74	-2.04	.72	.60	.87	-1.51
母＞父	*n*	2	14	4	34	7	14	2	32
	調整済み残差	.21	1.96	-.55	-1.35	1.55	.00	-2.47	.85
母＜父	*n*	2	6	5	54	3	18	14	32
	調整済み残差	-.15	-2.16	-.62	2.24	-1.24	.32	2.16	-1.08

Table 11 「不信・拒否」の父母間のズレの程度と「位置」との関連

		父				母			
		横	上	下	斜め下	横	上	下	斜め下
一致高群	*n*	24	1	3	6	24	1	4	5
	調整済み残差	-1.02	-.11	.60	.89	-3.11	.06	2.71	2.12
一致低群	*n*	45	4	5	6	52	1	3	4
	調整済み残差	-.50	1.76	.69	-.80	-.10	-.62	.63	.07
母＞父	*n*	43	0	2	10	50	3	0	2
	調整済み残差	.18	-1.57	-.99	1.33	.99	1.40	-1.68	-.99
母＜父	*n*	55	2	4	6	62	1	1	3
	調整済み残差	1.12	-.14	-.20	-1.18	1.61	-.77	-1.15	-.80

一致して高い者は，母と横並びの円を描くことが有意に少なく（$p < .01$），下（$p < .01$）や斜め下（$p < .05$）に自分を描くことが有意に多かった。また，父よりも母に強く「不信・拒否」を感じている者は，母よりも自分を下に描くことが有意に少ない傾向にあった（$p < .10$）。

加えて，「距離」（Table 9）では p-value ＝ .086であった。調整済み残差による検定で，父母間の「不信・拒否」が一致して高い者は，母との距離が小さい円を描くことが有意に少なく（$p < .05$），距離が大きい円を描くことが有意に多かった（$p < .01$）。さらに，父母間の「不信・拒否」が一致して低い者は，母との距離が大きい円を描くことが有意に少ない傾向にあった（$p < .10$）。

（3）「分離不安」の父母間のズレとの関連

父子円環イメージ画，母子円環イメージ画ともに，有意な結果は見出されなかった。

Ⅳ　考察

1．円環イメージ画における大学生の発達的特徴

本研究で示された円環イメージ画の「関係」における特徴をまとめると，父母ともに，概して２つの円が離れているものの出現頻度が高く，「内部」のような最も２つの円の密着度が高いと考えられるものの出現頻度が低くなっていると言える。中学生の母子円環イメージ画と父子円環イメージ画について五十嵐・萩原[13] は，本研究と同様，父母ともに２つの円が離れるイメージの出現頻度が高くなる傾向にあることを示している。また宮本・佐藤・北本[12] は，女子大学生を対象とした幼児期と現在の母子円環イメージ画の比較から，「内包」「内接」（幼児期）から「交錯」「分離」（現在）へという変化が認められたと報告している。このような，2つの円が離れていく様相に関して，松尾・小川[10] は，青年期に至り個としての自分を確立して親から自立して生きているという感覚が，円環イメージ画では自分と母親を独立した円で描くという形で表現されている，と述べている。また五十嵐・萩原[13] は，思春期の発達課題である，親からの分離・個体化に対する意欲や葛藤などの心象風景が反映されていると指摘している。本研究でも，これらの指摘と同様に，青年期における自我の確立と，そのために必要となる親からの独立という課題をめぐる様相が，円環イメージ画に投映されたものと見ることができよう。

「位置」について見てみると，父子円環イメージ画，母子円環イメージ画ともに上→下→斜め下→横の順で出現頻度が増加することが見出された。これは，中学生を対象とした五十嵐・萩原[13] の結果と一致している。また，大学生を対象とした幼児期の母子円環イメージ

画について，松尾・小川[8]は，自分を母の上に描く者が極めて少ないことを報告しており，本研究と同様の結果が得られていると言える。自分のイメージ円を母親の上に描くことについて，小川・松尾[6]は，疎ましさや反抗などの親を否定的に見やすい傾向が投映された可能性を示唆している。さらに松尾・小川[8]は，自分のイメージ円が母親のイメージ円の下にあることは，子どもにとって母親が見上げる存在であったことを表現していると指摘している。加えて松尾・小川[11]は，円の大きさが等しいこと，位置が横並びであることは親と対等であるという意識を示すと述べている。これらを踏まえると，大学生は，現在，親と対等の状態になりつつある状態を意識する（横の位置）中で，やはりかなわないという気持ち（上や斜め下の位置）が生じているものと考えられる。また，一部の者は情緒的独立の過程にあって反抗心（上の位置）が生じていると推察されるが，今後の詳細な検討が必要である。

「距離」については広範な結果が認められたものの，中学生を対象とした五十嵐・萩原[13]の結果と比較すると，母子円環イメージ画では大幅に短い範囲内に収まっていた。「距離」は，一般的に心理的距離を表現するものとして考えられることから，自我同一性の確立後，親への心理的距離の再接近が果たされた（金子[21]；田中[22]）結果がここに表れているものと示唆される。

「大きさの比」では，父母を自分より大きく描く者が圧倒的に多く，ついで自分を父母より大きく描く者が多かった。自分と親を等しい大きさで描く者は極めて少なかった。女子大学生を対象とした幼児期と現在の母子円環イメージ画の比較を行った宮本・佐藤・北本[12]は，母親＞自分から母親＝自分へという変化が認められたと報告している。しかしながら，現在のイメージ円のみを課題とした本研究では，宮本・佐藤・北本[12]の指摘とは一致しなかった。このことは，「幼少期」「現在」と区別しないで円環イメージ画を実施した場合，いずれかが一方の表象に取り込まれる可能性を示唆している。すなわち，本研究の場合，「現在」のイメージ画の中に「幼少期」から今までに形成された親子関係の表象が投映されたために，自分よりも親の方が大きいイメージを描いた可能性がある。これは，佐藤[18]の指摘する「愛着歴の表象」という観点からも示唆される。また，大学生になり，先に指摘したような親子関係の変質に伴って，親への畏敬の念を再認識した可能性もある。これらについては，今後さらなる検討が望まれる。

２．円環イメージ画と愛着との関連性について

円環イメージ画と愛着との関連性については，概して母親よりも父親において強く示された。これは，社会参画への機会が増大する大学生において，社会との接点が多いと考えられる父親のイメージが，中学生に比して増大したためと推察される。また，その関連の仕方は，交錯や外接といった「ほどよい」つながり方で，より２者間の距離が小さいほど安定した愛着が形成されていることが明らかとなった。加えて，親に完全に取り込まれているような状態（内部）であっても，決して愛着に対して安心感が高いわけではないことも明らかとなった。これらの結果は，大学生と親との間の適度な距離やかかわりを保つことが，肯定的な愛着表象の形成と関連していることを示唆している。

また，「位置」との関連については，自分が親よりも上であるとイメージしている大学生は，親との愛着に対して否定的に感じていることが示唆された。小川・松尾[6]は，円の垂直関係は支配―被支配関係を示すと述べている。この指摘を踏まえると，上の位置に自分のイメージ円を描くことは，「親を支配する」という，親子間の力動的関係が逆転した感覚を抱いており，その背景に安心できない愛着関係の存在があることが推察される。また，父母ともに，斜め下の位置にある者の「分離不安」得点の高さも示された。家族イメージ法を実施した中野・亀口[23]は，上左部は権威のある親イメージであると述べている。本研究の斜め下では，必ずしも左部に親が位置しているわけではないものの，中野・亀口[23]の指摘を踏まえれば，親の存在に圧迫感を感じているがために「安心感がほしい」「そのためには一時も離れていられない」と感じている可能性がある。

３．円環イメージ画と父母間の愛着のズレとの関連性について

本研究では，父親にも円環イメージ画を適用したことにより，父母間の関係性のズレの観点から詳細な検討が可能となった。この点について，円環イメージ画の指標ごとに，考察を加える。

まず「関係」については，父母双方に対して安定した愛着関係を形成している者は，父子円環イメージ画，母子円環イメージ画ともに交錯を多く描き，分離の円をあまり描かないということが示された。不信感を伴う関係については，母子円環イメージ画についてこれと逆の傾向が認められた。以上の結果は，養育過程の中で，一致した安心感を両親が示すことの重要性を表していると考えられる。加えて，母子円環イメージ画については，「外接」に興味深い結果が得られた。すなわち，父よりも母への不信感を強く抱く者は外接をあまり描かない一方，母よりも父へ不信感を抱く者は外接を多く描いた。ここから，「接する」円を描くことは，単なる密着感や安心感というだけではなく，他方の親への不信から来るもう一方の親への依存，という観点をも示している可能性がある。本研究では，松尾・小川[8；10；11]，小川・松尾[6]が示していた分類であ

る「内接」を描いた者が極めて少なかったため検討できなかったが,「接する」円を描いた者と「交錯」の比較など，詳細な検討が必要である。

「位置」については，母子円環イメージ画においてのみ有意な結果が得られ，横並びの円は父母双方あるいは母に対する安定した愛着と関連し，上，下，斜め下は父母双方あるいは母に対する否定的な愛着と関連していることが示された。また,「大きさの比」では，父母双方に対する安定した愛着が，自分を親よりも小さく描くことに関連していた。これらの結果を見ると，位置関係としては対等でありながら，親の力動的関係が強い状態である場合，最も愛着が安定しているということが示唆される。すなわち，心理的発達に伴って，たとえ親と対等に接するようになったとしても，その存在の大きさは幼少期と変わらずに大きなものであるという感覚が安心感に結びついていると言えよう。これに「距離」の結果を加えて考えると，さらにその心理的距離は，父母双方ともに密接なものであることが重要であるとも指摘できる。

しかしながら，これら父母間のズレの視点を詳細に分析するためには，父母による円環イメージ画の描画も重要であろう。今後は，中学生との比較を実証的に検討しながら，この点を明らかにする必要がある。また，発達的視点からの検討としては，児童期や成人期との比較も行うことが重要であろう。さらに，データ収集の問題としても，個別対面式によって，従来の描画研究で利用されてきた描画順序や消しゴムの使用などの指標や，描画後の質問による主観的感覚の検討も加える必要がある。その上で，集団実施による描画データの限界性についてさらに検討するとともに，臨床場面での適用を試みることがのぞまれる。

謝辞

円環イメージ画に関しては，筑波大学心理学系松尾和美先生（当時）にご指導いただきました。また，本研究の実施に際しては，北海道情報大学佐野秀行先生，ならびに多くの大学生の皆様にご協力いただきました。ここに記して，心より感謝申し上げます。

文献

1）吉田甫・山内光哉　2001　青年期の特色　山内光哉（編）発達心理学下　青年･成人･老年期　ナカニシヤ出版　pp23-37.
2）丸山明子・奇恵英　2006　青年期の家族サブシステム（母子・父子・両親間）と自我同一性の関連：Family System Test を用いた検討　福岡女学院大学大学院紀要：臨床心理学，3，11-22.
3）丹羽智美　2005　青年期における親への愛着と環境移行期における適応過程　パーソナリティ研究，13（2），156-169.
4）辻岡美延・山本吉廣　1978　親子関係の類型―親子関係診断尺度 EICA―　教育心理学研究，26，84-93.
5）日比裕泰　1986　動的家族描画法（K-F-D）：家族画による児童理解　ナカニシヤ出版
6）小川俊樹・松尾和美　2000　現代中学生のもつ母子関係イメージの検討―円環母子関係イメージ画法を用いて―　研究助成論文集，35，80-89.
7）大熊保彦　1988　家族アセスメント　岡堂哲雄（編）講座家族心理学第６巻　家族心理学の理論と実際　金子書房　pp173-193.
8）松尾和美・小川俊樹　1998　円環イメージ画にあらわれる幼児期の母子関係（１）　日本心理学会第62 回大会発表論文集，278.
9）松尾和美・小川俊樹　1999a　母子関係のアセスメント：展望　筑波大学心理学研究，21，179-185.
10）松尾和美・小川俊樹　1999b　円環イメージ画にあらわれる幼児期の母子関係（２）―「幼いとき」と「現在」の母子関係をあらわす二枚のイメージ画の比較から―　日本心理学会第63回大会発表論文集，880.
11）松尾和美・小川俊樹　2000　円環イメージ画にあらわれる幼児期の母子関係（３）―イメージ円の関係にあらわれる母親との心理的距離について―　日本心理学会第64回大会発表論文集，1075.
12）宮本邦雄・佐藤かおり・北本桜香　2001　女子大学生の内的作業モデルと家族表象―家族描画と円環母子関係イメージ画を指標として―　東海女子大学紀要，21，67-77.
13）五十嵐哲也・萩原久子　2008　円環イメージ画にあらわれる中学生の親子関係イメージと愛着との関連　北海道情報大学紀要，19（２），27-38.
14）吉良安之・田中健夫・福留留美　2007　学生相談来談者の学年ごとの問題内容と学生期の諸課題　学生相談研究，28（１），1-13.
15）Fury G, Carlson EA, and Sroufe LA 1997 Children's representations of attachment relationships in family drawings. Child Development，68，1154-1164.
16）Bowlby J 1969 Attachment and loss , vol.1 , Attachment. London : The Hogarth Press.
17）Bowlby J 1973 Attachment and loss , vol.2 , Separation : Anxiety and anger. London : The Hogarth Press.
18）佐藤朗子　1993　青年の対人的構えと親および親以外の対象への愛着の関連　名古屋大学教育学部紀要　教育心理学科，40，215-226.
19）五十嵐哲也・萩原久子　2004　中学生の不登校傾向と幼少期の父親および母親への愛着との関連　教育心理学研究，52，264-276.
20）金子俊子　1989　青年期女子の親子・友人関係における心理的距離の研究　青年心理学研究，3，10-19.
21）田中正　2003　青年期男子における親の養育態度と自我同一性の関係　名古屋文理短期大学紀要，27，1-4.
23）中野まり・亀口憲治　1992　思春期の子どもとその両親の家族イメージ―臨床群と非臨床群の比較を通して―　福岡教育大学紀要第４分冊，41，283-290.

（2008年９月３日受理）